

輝きのるつぼ

(原文)

曾根 優花 (17 歳)

東京都

晃華学園高等学校

今年は SDGs の目標達成を間近に控えた 2030 年。世界では大きな転換期を迎えています。そんな中、日本でも大きな変化が起きました。それは、「難民鎖国」の脱却です。そして日本には「仲間」が増えました。現在日本人は、10 年前には知りもしなかった国の人々と知り合い、共生しているのです。高校生の時に参加した模擬国連大会を機に世界へ目を向けるようになった私は、大学卒業後、難民の方々の生活支援、保護に携わる仕事に励んでいます。

たくさんの難民が入ってきたら日本社会は混乱したかと言われれば、実はそのようなことはありませんでした。正直、良いことばかり浮かんでくるのです。この日本社会の変化に伴って、私の視野は確実に、180 度拡張されたと思います。道をずっと右にお散歩に行くとそこには大きなキリスト教会が建ち、信者だけでなく、近所の人たちが教会に集まり平和なひと時を過ごすのです。少し左に行けば、イスラム教会が見えます。ハラルフードマークも馴染み、今ではそのような考慮がされている店が至る所に見受けられます。裏へ入れば、初めて聞くような国の郷土料理を提供する店や、珍しい伝統文化品を買い求める客で賑うのです。一方で、外国人が日本文化への理解を深めるために、日本の伝統文化品を扱う店が再興され、改めて日本文化を見つめ直す人々が増えたように思います。この「文化の give and take」は物理的にも精神的にも日本国民に豊かさを恵んでくれています。

加えて、庶民生活の幅を超え、近年では帰化した日本人のさらなる政界進出が著しいのです。日本を客観的にとらえられる視点は今日のグローバル社会において非常に大切なことです。多角的な政策により、日本のさらなる発展が期待できそうです。

難民の方々との仕事を始めて、もちろん、苦しい場面に遭遇することもあります。むしろ、想像を絶する経験をしてきた方ばかりです。命を追われ、危険を冒し、ようやく日本にやってきた方々をできるだけ多く受け入れることが要求されている一方、それが難しいのが 2020 年でしょう。少なくとも当時の私はそのような人達の現状に気づいていませんでした。難民の人たちの習慣、文化は理解しがたいし、遠い国だからと言って、他人事として見て見ぬふりをし続けていたように思います。しかし、10 年を過ごして、彼らを受け入れなければ出会えない価値観に私はたくさん遭遇しました。その度に、好奇心に掻き立てられ、誰にも取って変えることのできない貴重な彼らの文化、精神として受け入れるのです。そんな姿勢をこの 10 年の間に私は学ぶことが出来ました。当時年間約 50 人弱

しか難民を受け入れていなかったあの時と比べ、今では世界有数の難民を受け入れ国へと進歩しています。それは、日本人一人ひとりがさらなる世界への協力へと歩み始めた証拠なのです。

17歳のあなたは、大学に行き、多くの人と出会い、日本という殻を破って多くを学ぶ機会に恵まれることでしょう。その時は、ぜひ、自分から進んで海外に目を向け、知ろうとする姿勢を持ち続けてほしいのです。大学に行けば、論文やプレゼンテーションなどでの意見交換があり、社会に出れば、外国人でなくても、多様な人々との交流のチャンスがあるはずです。世の中には出会ったことのない「価値観」という宝石が至る所に散りばめられています。あなたは、できるだけその多くの「宝石」を見て、その計り知れない種類の多さに驚き、発信していくことが出来れば、必ず、内面的に豊かな人間に成長していきます。そうすれば2030年を迎えるとき、今の私よりも、世界の捉え方がきっと上手になることでしょう。